

# 状態動詞・完了形・進行形・状態 受動態に見られる共通特性

鎌 田 精三郎

0. 英語の状態動詞・完了形・進行形・一部の受動態の間には、いくつかの共通した統語的・意味的特徴が見られる。本稿では、これらの間にはある1つの共通した特性があること、この特性によって状態動詞が何故に進行形にならないのかが説明できることなどを考察する。

## 1. 統語的共通性

状態動詞は命令文に用いることができないが、完了形・進行形・受動態も一部の例外は別とすれば、一般に命令文には用いない。

- (1) a. \* *Resemble* your father.
- b. \* *Have left* the room.
- c. \* *Be coming* here.
- d. \* *Be visited* by Mary.

Quirk, *et al* (1985, p. 827) は、次のような完了形・進行形の命令文を例示している。

- (2) a. Start the book and *have finished* it before you go to bed.
- b. *Be doing* your homework when your parents arrive home.

native speaker の中には、完了形命令文は容認不可能とする人も多い。(2a)のように容認可能とされる場合には、before you go to bed のように一定の時間領域を持つ時間副詞と共起しなくてはならない。Culicover (1971, p.70 f)には、次のような例が見られる。

(3) *Have finished* reading 'War and Peace'

- a. \*  $\phi$ .
- b. \* tomorrow.
- c. by tomorrow.

命令文は、発話時もしくは未来のある時点における行為の実行を相手に求めるものである。完了形命令文では、一定の時間領域を持つ時間副詞と共起した場合に、未来完了の意味が与えられ、未来のある時点までの行為の完了を相手に求めることになる。

進行形命令文もめったに見られないが、(2b)では、未来の一時点(すなわち、when your parents arrive home)における「宿題をする」と言う行為の継続を相手に求めるものであるから、容認可能となるようである<sup>(1)</sup>。

Quirk, *et al* (1985, p.827) は受動態命令文についても例示している。

- (4) a. Don't be deceived by his looks.  
b. Don't be told what to do.

Quirk, *et al*によれば、受動態の命令文は、(4)のように否定命令で主に用いられ、一般に'Don't allow yourself to be.....'と言う意味を表わすとしている。一方、肯定命令の受動態は、余り一般的でないとしている。

受動態には、動作受動態 (actional passive) と状態受動態 (statal passive) の二種類がある。前者には、(5a)のように「by+動作主名詞」が続くことができるが、後者は「be+形容詞」として解釈され、(5b)のように「by+動作主

名詞」が続くことができない<sup>(2)</sup>。

- (5) a. He was killed *by his servant*.  
 b. He is known to everybody in the town.

Quirk, *et al* の例示している(4)の受動態命令文は、動作受動態の命令文である。状態受動態は、命令文には全く用いることができない。状態受動態は、状態動詞・完了形・進行形と同様に、さらに *be able to* や *try to* の後が続くことができない。

- (6) a. \* John is able to *resemble* his father.  
 b. \* John is able to *have come*.  
 c. \* John is able to *be coming*.  
 d. \* John is able to *be known* to everybody in the town.

*seem to* には、(7a) のように *come right now* のような単一の出来事を表わす非状態動詞は続かないが、(7b) のように反復的出来事を表わす非状態動詞、(8) のように状態動詞・完了形・進行形・状態受動態が続くことができる。

- (7) a. \* John seems to *come right now*.  
 b. John seems to *come here every Sunday*.

- (8) John seems to {  
 a. *know* the truth.  
 b. *have come* already.  
 c. *be coming*.  
 d. *be known* to everybody in the town.

## 2. 意味的共通性

英語の法助動詞は、認識的 (epistemic) 意味と義務的 (deontic) 意味と言う

2つの意味を持つと言われて来た。認識的意味は、文の内容に対する話者の信念の度合いを示すものであり、義務的意味は、文の主語の能力や意志、義務などを示す。法助動詞 *will*, *can*, *may*, *must* の持つ意味を(9)に示す（( )内の英語は意味のパラフレイズである）。

(9)

	認 識 的	義 務 的
<i>will</i>	probability (I suppose that~/ It is probable that~)	volition (intend to/be willing to)
<i>can</i>	possibility (It is possible that~)	ability (be able to) permission (be allowed to) possibility (It is possible for~to~)
<i>may</i>	possibility (It is possible that~)	permission (be permitted to)
<i>must</i>	certainty (It is certain that~) logical necessity (It is necessarily the case that~)	obligation (be obliged to) necessity (have to/be required to)

義務的法助動詞に続く動詞（句）は、(10)に示すように、動作を表わす非状態動詞（句）でなくてはならない。

- (10) a. I *will* (=intend to) *stop smoking*.  
 b. She *can* (=is able to) *read and write Chinese very well*.  
 c. You *can* (=are allowed to) *smoke here*.  
 d. Can we (=Is it possible for us to) *meet* again tomorrow?  
 e. May I (=Do you permit me to) *open* the window?  
 f. You *must* (=have to) *try to get to work on time*.

(11)のように、文の主語の意志や努力で実現可能なことを表わす——すなわち、主語にとって自己制御的 (self-controlable) な——動詞句も、義務的法助動詞の後に続くことができる<sup>(3)</sup>。

- (11) a. He can *be a great scientist* some day. (=It's possible for him to be a great scientist some day.)  
 b. You must *be a good boy*. (=You have to be a good boy.)

この他に、動作受動態も義務的法助動詞の後に続くことができる。

- (12) a. These engines can *be removed* from a boat with relative ease. (=It's possible for you to remove these engines from a boat with relative ease.) (Ehrman 1966, p. 14)  
 b. These orders must *be carried out* immediately. (It is required that these orders be carried out immediately.) (浅川・鎌田, p. 185)

認識的法助動詞は、蓋然性や可能性、確実性など、文の内容に対する話者の信念の度合を示すものであるから、一般に動作を表わす動詞（句）でも状態を示す動詞（句）でもその後が続くことができる。但し、状態動詞が後に続いた場合は、一般に認識的意味にしか解釈されない。

- (13) a. My father will *stop smoking*. (=I suppose that my father is going to stop smoking.)  
 b. That'll *be the policeman*. (=I suppose that's the policeman.)  
 (14) It can't *be true*. (=It's impossible that it is true.)

can が認識的意味で用いられるのは、通常否定や疑問の場合である。これ以外では、can のかわりに may を用いて認識的意味を表わす。但し、could は否定や疑問以外でも認識的に用いることができる (c.f. 浅川・鎌田, p. 170)。従って、上述の (10b, c), (11a), (12a) の can は義務的意味しか表わさない。

- (15) a. I wonder where Mary is. She may be with Nancy.

b. We may visit Hokkaido next Summer. (=It is possible that we'll visit Hokkaido next Summer.)

(16) a. It must be true. (=It is necessarily the case that it is true.)

b. John must know them very well. (=It is certain that John knows them very well.)

must が認識的意味を表わすことができるのは、その後続く動詞（句）が状態を示す時である。従って、(10f), (12b)の must は義務的意味しか表わさない。

(17)のように、法助動詞の後に完了形ないしは過去を示す have が続いた場合には、一般に認識的意味しか表わさない<sup>(4)</sup>。

(17) a. She will not have forgotten you.

(彼女があなたを忘れてしまったなんてないでしょう)

b. She can't have gone to school—it's Saturday.

(彼女が学校へ行ったはずがない) (Swan 1980, p. 130)

c. This gesture, which I admit I may have misinterpreted, was certainly taken in bad part by the policemen. (このしぐさは、私が誤解してしまったかもしれないと認めるが、確かに警官に悪意にとられた) (Murdoch, p. 151)

d. Sammy must have bought him (=the dog) for the new film.

(Sammyはその犬を新しい映画用に買ったに違いない) (*Ibid.*, p. 125)

さらに、(18)と(19)のように進行形が後に続いた場合も、一般に法助動詞は認識的意味しか表わさない<sup>(5)</sup>。

(18) a. The police will be asking us what we're doing.

(Murdoch, p. 130)

- b. He will still be reading his book.

(18a)は近い未来にある行為が起こるのを，(18b)は現在ある行為が進行しているのを話者が推量していることを示す。

- (19) a. She can't be swimming all day.

(彼女は一日中泳いでいるはずがない)

- b. Jill says she might be calling this afternoon.

(Quirk *et al* 1985, p. 236)

- c. John must be calling soon.

さらに，(20)のように状態受動態が後に続く場合，法助動詞は認識的意味を表わす。

- (20) a. He'll be known to everybody in the city.

(=I suppose that he is known to everybody in the city.)

- b. She cannot be married.

(=It is impossible that she is married.)

- c. He may be interested in the news.

(=It is possible that he is interested in the news.)

- d. She must be already married.

(=It is certain that she is already married.)

### 3. 共通性は何故生まれるのか？

上述のように，状態動詞・完了形・進行形・状態受動態の間には，いくつかの統語的・意味的共通性が見られた。それでは，何故にこのような共通性がこれらの間に生まれるのであろうか？ (21)～(24)の統語的事実が，この質問に答えてくれるように思える (c. f. Ota 1972b, p. 61)。

- (21) a. He already *knows* it.  
 b. ? He already *comes* here.
- (22) a. I've already *broken* three cups.  
 b. He *has* already *come*.
- (23) a. He *is* already *sleeping*.  
 b. He *is* already *coming*.
- (24) a. She *is* already *married*.  
 b. The windows *were* already *broken*.

(21)~(24)が示すように、状態動詞・完了形・進行形・状態受動態は *already* と共起できる。しかし、(21b) に示すように、単一の出来事を表わす非状態動詞との共起はむずかしい。

*already* と言う副詞は、「ある一定の時間（例えば現在時制で表わされている場合には、現在の時点）までに、ある動作・状態（の一部）がすでに始まっている」と言う意味を表わす (c. f. 浅川・鎌田, p.150)。従って、状態動詞・完了形・進行形・状態受動態が *already* と共起できると言うことは、これらの表わす動作・状態がある一定の時点（例えば現在時）ではすでに始まっていることになる。

現在時（もしくは発話の時点）を  $t_0$  とし、過去のある時点  $t_{0-n}$  とした場合に、(25a) で示す状態動詞は次のように言うことができよう——彼は過去のある一時点 ( $t_{0-n}$ ) にて私と知り合いになって以来、現在 ( $t_0$ ) でも私を知っている。この意味は、およそ (25b) のように表わすことができよう<sup>(6)(7)</sup>。

- (25) a. He *knows* me very well.  
 b.  $\forall x \leq t_0$  (He knows me at x)

(26a) で示す現在完了形は、次のように言うことができよう——彼は過去のある一時点 ( $t_{0-n}$ ) にてヨーロッパに行き、現在 ( $t_0$ ) もヨーロッパにいる。これもおよそ (26b) のように表わすことができよう。

- (26) a. He *has gone* to Europe.  
 b.  $\forall x \leq t_0$ . (He is in Europe at x)

(27a)の完了形に関しては、次のように言うことができよう——過去の一時点 ( $t_{0-n}$ ) から現在 ( $t_0$ ) までに、John がここに来ると言う出来事があった。これはおおよそ (27b) のように表わすことができよう。

- (27) a. John *has often come* here.  
 b.  $\exists x \leq t_0$ . (John is here at x)

(28a)の進行形に関しては次のように言うことができる。彼は過去の一時点 ( $t_{0-n}$ ) にて手紙を書き始め、現在 ( $t_0$ ) も手紙を書いている——すなわち、「手紙を書く」と言う動作の継続を示す。これもおおよそ (28b) のように表わすことができよう。

- (28) a. He *is writing* a letter.  
 b.  $\forall x \leq t_0$ . (He does the work of writing a letter at x)

(29a)の状態受動態に関しては次のように言うことができる。その窓は過去の一時点 ( $t_{0-n}$ ) にて破れ、現在 ( $t_0$ ) でも破れている。これはおおよそ (29b) のように表わすことができよう。

- (29) a. The window *is broken*.  
 b.  $\forall x \leq t_0$ . (The window is in the state of being broken at x)

以上から、状態動詞・完了形・進行形・状態受動態が現在時制で用いられた場合には、過去の一時点 ( $t_{0-n}$ ) から現在時 ( $t_0$ ) までの時間の幅の中で、現在時も含めたあらゆる時点（もしくは(27)のように、過去から現在時までのいくつかの

任意の時点)で、その文の表わす命題 (proposition) が成り立つことが述べられていると言えよう。

状態動詞・完了形・進行形・状態受動態の持つ特性を、現在時のみならず過去や未来をも含み込むようにまとめると(30)のようになるであろう。

$$(30) \quad \forall x \leq t_i (P \text{ at } x)$$

OR  $\exists x \leq t_i (P \text{ at } x)$  in some cases of perfect forms.

(30)において、 $t_i$  は任意の時点を示す。 $t_i$  を用いることによって、現在時ばかりでなく、過去や未来のすべての時点を組み入れることが可能となる。Pは文の表わす命題を示す。

(30)に示すように、状態動詞・完了形・進行形・状態受動態は、 $\forall x \leq t_i (P \text{ at } x)$  と言う意味的な特性を持っている (もしくは、持つことができる)。この特性が、上述の統語的・意味的共通性を引き出したのではないかと思われる。

#### 4. む す び

ここでは、(30)を仮定することによって、次に何が説明できるかを考えてみる。

(31)に示すように、状態動詞は一般に進行形にならないと言われている。

$$(31) \quad \text{a. } \text{Mary} \left\{ \begin{array}{l} \text{knows} \\ *is \text{ knowing} \end{array} \right\} \text{ the answer.}$$

$$\quad \text{b. } \text{Mary} \left\{ \begin{array}{l} \text{loves} \\ *is \text{ loving} \end{array} \right\} \text{ John.}$$

それでは、何故に状態動詞は進行形をとらないのであろうか？ 上述のように、状態動詞も進行形もともに(30)の意味的特性を持つと考えられるので、状態動詞を進行形にするとその意味が冗長的 (redundant) になる。故に、状態動詞

は進行形にする必要がなくなると考えられる。

Leech は、状態動詞と言われている動詞でも、次のように進行形が可能な場合があるとしている (c. f. Leech 1971, p. 22 f)。

- (32) a. I'm *smelling* the perfume.  
 b. I'm *feeling* the ground with my foot.  
 (私は地面を足で踏んでいます)

(32)は 'What are you doing?' に対する答えとして機能し、この場合に *smell*, *feel* は「匂いを嗅ぐ」、「踏む」と言う行為動詞の意味を持つ。従って(32)は、(28)の場合と全く同じく「動作の継続」の意味を表わす。

- (33) a. What were you *wanting*?  
 b. I'm *hoping* you'll give us some advice.

(33)における *want* と *hope* は、行為動詞の進行形の表わす「動作の継続」として解釈されると言うよりも、むしろ進行形の持つ「一時的な性質」という意味が強められていると見ることができる。(33a)は「ある過去の時点では何がほしかったのか」と言う意味を表わし、(33b)は「あなたが何か忠告してくれるのを現時点で希望している」ことを表わす。(33)の持つ進行形の意味は、(30)よりもむしろ(34)で表示した方が適切であろう。

- (34)  $\exists x (P \text{ at } x)$

状態動詞において、このように進行形が可能か否かは、統語的な要因によるのではなく、むしろ意味的な要因によると言える。例えば(35)に示すように、*contain*, *include* などの事物の構成を示す動詞は、ほとんど全く進行形が不可能である。

- (35) The book  $\left\{ \begin{array}{l} \text{contains} \\ *is\ containing \end{array} \right\}$  a lot of errors.

これは、contain や include という動詞自体の持つ意味のために、「動作の継続」にも「一時的性質」にも解釈されにくいためである。

最後に完了進行形について考察する。

- (36) I have read the book.

read という動詞の性質上、(36)は完了（「私はその本を読んだところだ」）もしくは経験（「私はその本を読んだことがある」）の意味に解釈される。この場合、完了形の意味表示は(37)のようになるであろう。

- (37)  $\exists x \leq t_0$ . (I read the book at x)

(36)を(38)のように現在完了進行形にすると継続（「私はその本をずっと読んでいる」）となる。

- (38) I have been reading the book.

(38)の完了進行形の意味は(39)のように表示することができよう。

- (39)  $\forall x \leq t_0$ . (I read the book at x)

このように、動作を示す非状態動詞の場合には、完了形と完了進行形とでは(37)と(39)のような意味の違いが生ずると言えよう。

以上、本稿では状態動詞・完了形・進行形・状態受動態における共通特性を

探り、その結論をもとに何故に状態動詞は進行形にならないかその理由を示した。

### 注

- (1) 否定の進行形命令文は、未来を表わす時間副詞が共起しなくても許されるようである。

(i) And don't be acting with the maggot with it (=the dog) either. (その犬と気まぐれを演じていてもしょうがないよ) (Murdoch, p. 124)

(i)の場合には、発話時にある行為の継続をやめるように相手に求めるものである。

- (2) 次は動作受動態とも状態受動態とも解釈可能である。

(i) The window was broken.

動作受動態では、「その窓は破られた」と言う意味を表わし、状態受動態では「その窓は破れていた」となる。

- (3) 動詞句が自己制御的か否かを test する一つの方法に、命令文が可能かどうかがある。

(i) Be a good boy.

(ii) Be quiet.

(iii)\* Be tall.

自分の意志では自由に背が高くなれないから tall は自己制御的とは言えず、(iii)のように命令文にはなれない。

- (4) must や should は、have がその後にも義務的に解釈される場合がある。

(i) You must have completed the work by next April. (Ota 1972 a, p. 47)

(ii) I should have studied yesterday.

(昨日勉強すればよかった) (浅川・鎌田, p. 174)

- (5) must の場合に、(i)で示すように、後に進行形が続いても義務的に解釈される場合がある (c. f. Ota 1972 a, p. 47).

(i) You must be going.

(i)は行くと言う行為の即時実行の必要性が述べられている。

- (6)  $A < B$  は、A が B に時間的に先行することを表わす。 $A \leq B$  は、A が B に時間的に先行するか、あるいは A と B は同時を表わす。

- (7) 以下の記述において、 $\forall$  を全称記号、 $\exists$  を存在記号と言う。 $\forall x$  は「あらゆる x について～である」を、 $\exists x$  は「～であるような x が存在する」をそれぞれ意味する。

## 参考・引用文献

- 浅川照夫・鎌田精三郎. 「助動詞」太田朗・梶田優編『新英文法選書第四巻』。東京：大修館書店（近刊）。
- Culicover, D. W. 1971. *Syntactic and semantic investigations*. Unpublished Ph. D. Dissertation. MIT.
- Ehrman, M. E. 1966. *The meaning of the modals in present-day American English*. The Hague : Mouton.
- Leech, G. N. 1971. *Meaning and the English verb*. London : Longman.
- Murdoch, I. 1954. *Under the net*. London : Penguin Books (1960).
- Ota, A. (太田朗) 1972a. "Modals and some semi-auxiliaries in English." *ELEC Publications* Vol. 9, 42-68.
- \_\_\_\_\_. 1972 b. "Comparison of English and Japanese, with special reference to tense and aspect." *Studies in English Linguistics* No. 1. Tokyo : Asahi Press, 35-70.
- \_\_\_\_\_. 1980. 『否定の意味——意味論序説』東京：大修館書店。
- Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English modals*. London : Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London : Longman.
- Swan, M. 1980. *Practical English usage*. London : Oxford University Press.